

【熊本国税局長賞】

「ゾンビから恋まで支える税金」

豊後大野小中一貫教育校大野小中学校（中学部）

九年 釤宮 琴音

「ゾンビが襲つてきたら、どこに逃げる？」

そんなことを、友達とふざけて、話したことがある。「学校！」「公園！」「図書館！」など、いろいろな案が出た。けれど、私はふと気づいた。私たちが「安全そう」と思つて挙げた場所は、すべて税金で作られ、整られた場所だった。学校は公立であれば、建物も先生の給料も、教科書や備品も、貸し出しシステムや職員さんの働きなど、すべてに税金が使われている。つまり、私たちが「何かあつたときに逃げ込みたい」と思う場所は、すべて税金によつて作られているのだ。ふざけた空想だつたはずなのに、気づけば「税金つて、私たち命を守つてくれる存在なんだ」と思うようになつていった。

でも、税金が支えているのは命だけではない。ある友達が「この前、公園で告白成功したんだよねー」と話していた。そのとき、私は思わず笑つてしまつたが、よくよく聞いてみると、その公園はとても整備されていて、ライトもありとても雰囲気がでており、雨上がりでもきれいに清掃されていたそうだ。でも、そのとき私はこう思った。「それ、全部税金で支えられてるんじゃない？」と。公園の管理費、清掃の方の人的人件費、夜のライトの電気代、すべて税金だ、つまりその告白は、「税金に支えられた恋」だつたのだ。ちよつと変な言い方だけれど、それに気づいたとき、税金の存在がとても身近に感じられた。税金というと、よく「道路や橋を直すお金」「病院や警察に使うもの」と思われるがちだ。もちろん大切な使われ道だ。でも本当はもっとたくさんの「気づかれにくい日常」を支えてくれているのだ。誰かの命を守る避難所も青春の思い出をつくる公園も、税金によつて守られ支えられた毎日を生きている。そしてそのこと気づかないまま、あたり前のように過ごしている。でも、私はこれから、こう考えたい。税金は、ゾンビのような「ありえない大事件」から、誰かの恋のようない常の大切な瞬間まで、そつと支えてくれるものだと。税金は目に見えにくい。けれど、私たちの暮らしのそばにある。何も起きてない“ふつうの日”を作るために、ずっと働いている存在だ。だから私は、将来、税金を納める立場、納税者になつたとき、こう思える大人でいたい。「このお金で、誰かの命や恋が守られるかもしれない。」と。

税金は、そんなふうに考えれば考えるほど、かつこいい仕組みだと思うようになった。